

保育者養成における実習の意義

— 実習の振り返りから見る学生の成長（その1） —

福山多江子・永井 優美

I. 問題と目的

1、はじめに

本学の幼児教育科では、幼稚園教員養成課程認定及び保育士養成課程認定を受け、90%以上の学生が幼稚園教諭二種免許・保育士資格の両免の取得を目指している。

実習体系は、1年次後期の11月中旬から2週間の期間で観察・参加実習（教育実習Ⅰ）を行い、1年次後期の2月初旬から12日間の期間で保育所実習（保育実習Ⅰ）、2年次前期の6月中旬から2週間の期間で責任実習（教育実習Ⅱ）、2年次後期の9月初旬から12日間の期間で保育所実習（保育実習Ⅱ）、2年次前期5月から後期12月までの期間に12日間の施設実習（保育実習Ⅲ）を随時実施し、計5回の実習を行うことになっている。

実習園については、学生の希望園に受け入れ依頼を送付し、受け入れに対して諾否の返答をいただく形をとっている。したがってなるべく学生の希望する園を尊重し、実習園を決定している。決定した園は、殆どが私立幼稚園のため、その園の教育課程により保育方針が異なり、実習生の受け入れの態勢や指導方針も多様となる。

2、指導の状況

実習指導の授業時間構成は、1年次前期に通年で保育実習指導、1年次後期に半期で教育実習指導となっている。

幼稚園の教育実習指導は、9月中旬から始まり、幼稚園教育要領の理解、実習に向けての心構え、幼稚園生活の全般について（1日の流れ、保育者の仕事と役割、実習生としての配慮事項）、実践力を身に付けるための手遊び、絵本の読み聞かせ、紙芝居の読み方、パネルシアター、記録の取り方・実習日誌の書き方等を主として講義・演習を行い、11月の実習に学生を送り出している。

3、目的

平成14年度の文部科学省による幼稚園教員の資質向上に関する調査研究協力者会議報告書「幼稚園教員の資質向上について—自ら学ぶ幼稚園教員のために」の幼稚園教員に求められる専門性・養成段階における課題と展望において、養成段階における基本的視点として、幼児理解に基づき、遊びを通じて総合的に指導するという幼稚園教員の基盤的な専門性を養成することが示されている。養成段階における課題としては、教員志願者自身の多様な体験の確保や得意分野の素地の形成、実践力の育成、教員養成のための環境の充実等があげられるとある。

これらのことを学生の指導と関連させて考慮すると、実習に送り出す事前の授業での座学や実践力を育むことは勿論のこと、実習後の学生の振り返りを調査・研究することにより、

実際の現場で保育者が子どもに対しどのような援助を行い、どのようなことを重視していたかという実践を通して得た学びや、実習生に対しどのようなことを要求し、どのような指摘をいただいたかということ省察することができ、より現場に適し、保育者としての資質向上にもつながっていくような総合した指導ができるのではないかと考えた。

そこで本研究では、全5回中最初の実習である幼稚園教育実習について体験後の振り返りアンケートを学生に行い、それらを分析し、その結果を今後の指導に取り入れることにより、これからの実習、ひいては保育者としての資質向上という未来を見据えてよりよい授業の展開を目指すことを目的とする。

Ⅱ. 調査の方法

1、アンケートの作成

アンケートについては、実習園の名前や10日間の実習担当のクラス配分を記述し、その後、実習の振り返りに必要と思われる項目をはい・いいえで回答した後、自由記述を行うという形式で構成した。

質問内容

- | | |
|--------------------------------------|--------|
| 項目1：子どもたちの名前は全員覚える事ができた。 | はい・いいえ |
| 項目2：1日の先生の動きが分かった。 | はい・いいえ |
| 項目3：1日の幼稚園の仕事を覚える事ができた。 | はい・いいえ |
| 項目4：実習日誌は要点を押さえて記述することができた。 | はい・いいえ |
| 日誌に関してどのような注意を受けましたか？（自由記述） | |
| 項目5：積極的に子どもとかかわることができた。 | はい・いいえ |
| どのような関わりをしましたか？（自由記述） | |
| 項目6：適切な指導や援助の方法が分かった。 | はい・いいえ |
| どのようなことが分かりましたか？（自由記述） | |
| 項目7：先生としての役割を体験することができた。 | はい・いいえ |
| 項目8：幼稚園教諭という仕事の楽しさが分かった。 | はい・いいえ |
| どのような楽しさが分かりましたか？（自由記述） | |
| 項目9：幼稚園教諭という仕事の厳しさ・大変さが分かった。 | はい・いいえ |
| 今回の実習でうれしかったことを書いてください（自由記述） | |
| 今回の実習で難しいと感じたことを書いてください（自由記述） | |
| 項目10：今回の実習で非常に勉強になったことを書いてください（自由記述） | |
| 項目11：これからの自分の課題を書いてください（自由記述） | |

上記のアンケートにおいてそれぞれの学生が体験した実習の形態、基本的な幼稚園生活の流れ、保育者の子どもとの関わり方や援助の仕方、幼稚園教諭の役割の他、実習を体験した後に感じたことなどはい・いいえの回答と、自由記述の形で行いそれらを分析し今後の指導に活用できるように考察した。

2、アンケートの実施

(1) 調査期間

2014年（平成26年）12月1日（実習終了後、最初の教育実習指導の時間）

1年次11月の幼稚園教育実習に参加した後、最初の教育実習指導の授業時に実施した。

(2) 調査方法

学生193名中授業に参加した184名

(3) 倫理的な配慮

学生に回答させるに当たり趣旨説明を行い、調査結果については目的以外に使用しない旨を伝え、学生全員から同意を得た。

Ⅲ. 結果

1、実習の配属クラス配分について

n=184

表 1

10日間同じ	57	31%
5日間ずつ	56	30%
3日、3日、4日ずつ	60	33%
1日毎	1	0.5%
毎日違う	10	5.5%

実習の配属クラスの配分については、3日、3日、4日ずつ、年少、年中、年長と3学年を均等な割合で実習を行った学生が多く、次に10日間すべて同クラスで行い、続いて5日間ずつという配属で、9割をしめるという結果であった。

2、子どもの名前の記憶について

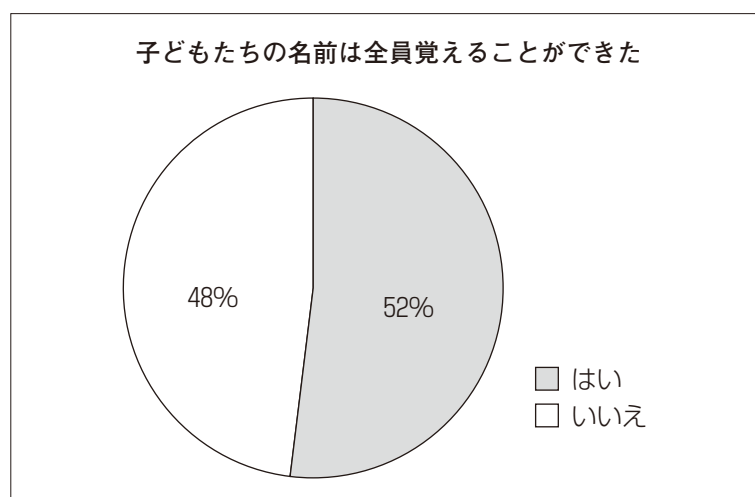


図 1

子どもたちの名前については、約半数の学生が全員覚えることができ、50パーセント弱ができなかったという結果であった。

3、1日の保育の流れについて

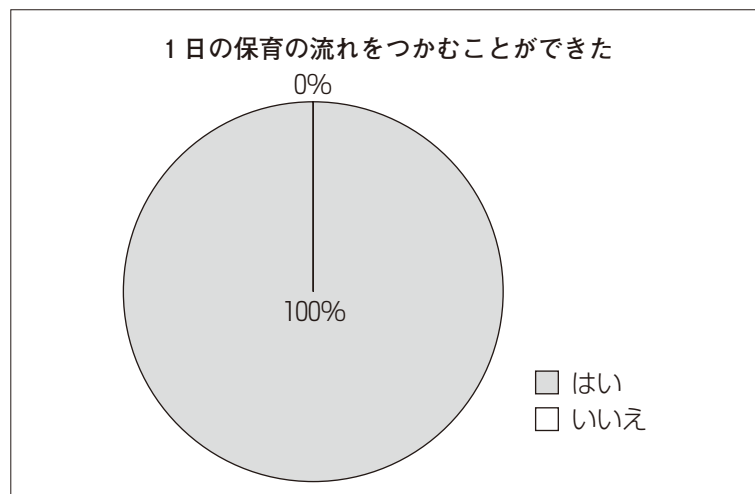


図 2

1日の保育の流れに関しては、2週間の実習であるが、この期間においての流れについては全員が把握できたようである。

4、 1日の保育者の動き

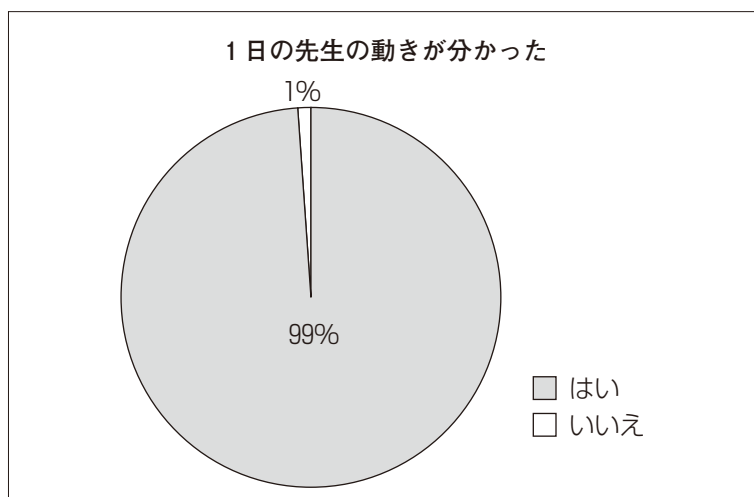


図 3

1日の保育者の動きに関しては、ほぼ全員の学生が理解できていたことが分かる。

5、 1日の幼稚園の仕事

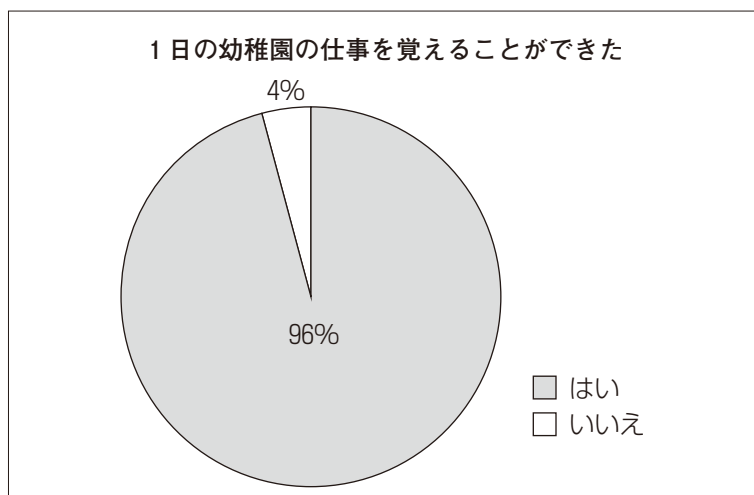


図 4

幼稚園の1日の仕事の把握については、殆どの学生が覚えることができていたという結果であった。

6、実習日誌の書き方について

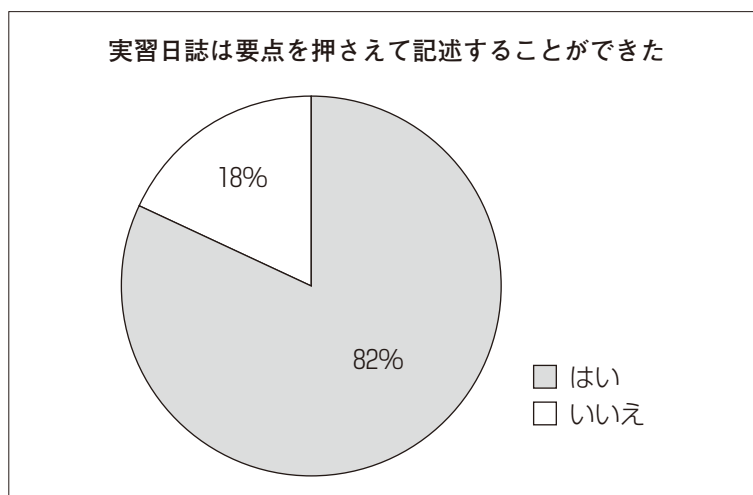


図 5

実習日誌に関しては、要点を押さえて記述することができたと答えた学生は、約 8 割という結果であった。

* 日誌に関しての主な諸注意について

①字の癖や書き方に関する注意

まっすぐ書く。

丁寧に書く。

字の大小について（主に小さすぎる）。

項目をそろえる。

②子どもの様子や環境構成に関して具体的に記述すること。

③保育者の援助の在り方や言葉かけについて、その言動の背景にある保育者のねらいや意図などに関しても考慮して記述することができるようにすること。

④保育者の言葉かけによる子どもの変化についても記述すること。

⑤全てを記述するのではなく、詳細に書く箇所と、まとめて書く箇所とのメリハリをつけるようにすること。具体的かつ簡潔に記入すること。

⑥実習生の感想や疑問を記述すること。

7、子どもとの関わりについて

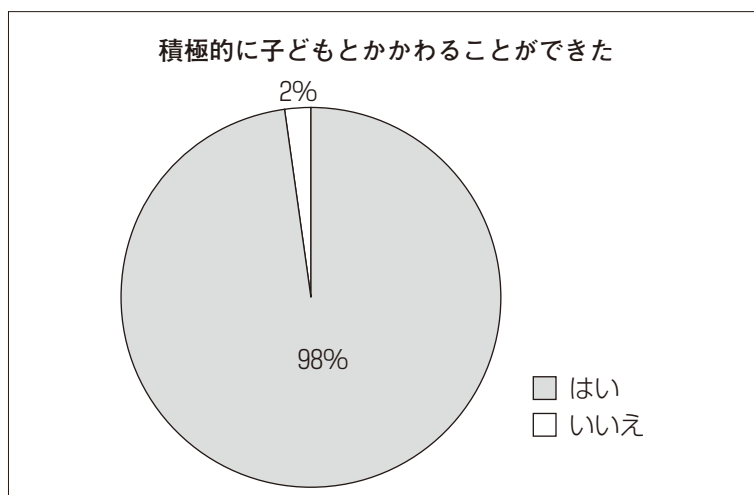


図 6

子どもとの関わりについては、殆どの学生が積極的に行動することができたという結果であった。

* 具体的な学生の積極的な関わり

- ①積極的に子どもたちに声をかけて遊んだ。
- ②遊びが広がるようにするため、子どもたちの遊んでいる遊具が使用しやすいようにそれを子どものそばに置いた。
- ③大きな声で誰に対しても積極的に笑顔で挨拶をするよう心がけた。
- ④なるべく一緒に楽しみながら遊んだ。
- ⑤子どもの名前を覚え、その子どもの名前を呼んでから目を見て話すように心がけた。
- ⑥周囲を見て、1人で遊んでいる子どもがいないように心がけた。
- ⑦遊んでいる子どもたちに普段どんな遊びをしているかを聞き、遊びの種類の把握に心がけた。
- ⑧毎日、クラス全員の子どものに話しかけるよう心がけた。
- ⑨子どもに共感し、それに応えるよう心がけた。
- ⑩遊ぶときに、男の子と女の子と交互に遊ぶよう心がけた。
- ⑪保育者の声掛けをなかなか聞けない子どもに対して注意を促した。
- ⑫泣いている子どもの気持ちになって一緒に解決するよう心がけた。

8、適切な指導や援助の方法について

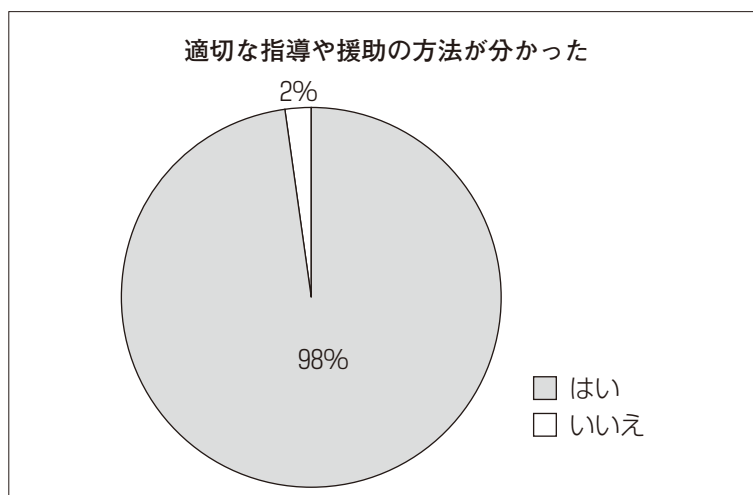


図 7

保育者の子どもへの適切な指導や援助の方法が理解できたと答えた学生は、この2週間という期間の中ではあるが、98%であった。

* 保育者の具体的な援助の方法

- ①いざこざが起きたときにはお互いの意見を聞き、お互いが納得するよう丁寧に説明をしていた。
- ②どんなに忙しくとも子どもの言葉は無視せずしっかりと聞いていた。
- ③一人一人の子どもの成長や発達に合わせた援助を行う。
- ④子どもに対しすべてを援助するのではなく、その子どもが自分の力でどこまでできるかを把握したうえで、その子に合った援助を行う。
- ⑤子どもたちの言葉で仲直りをさせる。
- ⑥苦手な食べ物は、根気強く声掛けをし、援助することによって子どもも頑張って食べることができる。食べられたときには、思い切り褒めるよう心がける。
- ⑦やってはいけないことをした子どもに対しては、声色を変化させて注意を促す。
- ⑧クラス全員と平等に関わること。
- ⑨子どもに対し、口で注意するだけではなく、大人が手本となること。
- ⑩「頑張れ」と言う言葉は時には子どもにとって抽象的なため、分かりにくことがある。そのため、どんなふうに頑張ればよいかを具体的に伝えること。
- ⑪常に全体を見渡しながら子どもと接する。
- ⑫話が脱線したときに、子どもの思いを聞きつつ、次の話に持っていくように促す。時にはきっぱりと話を切ることも必要である。

9、先生としての役割の体験について

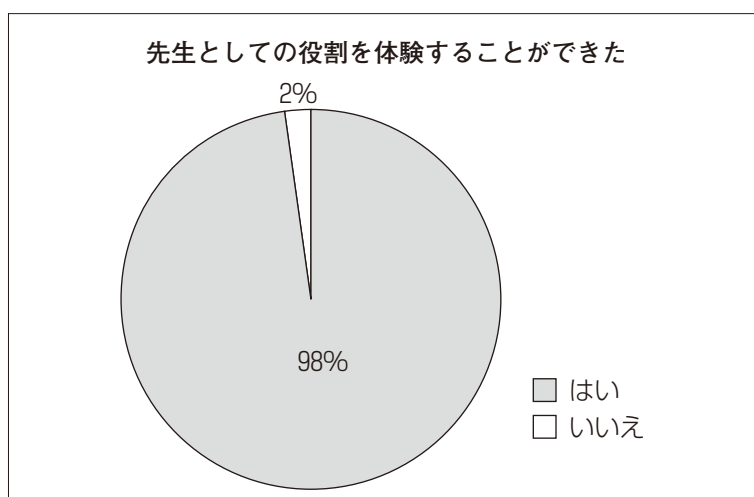
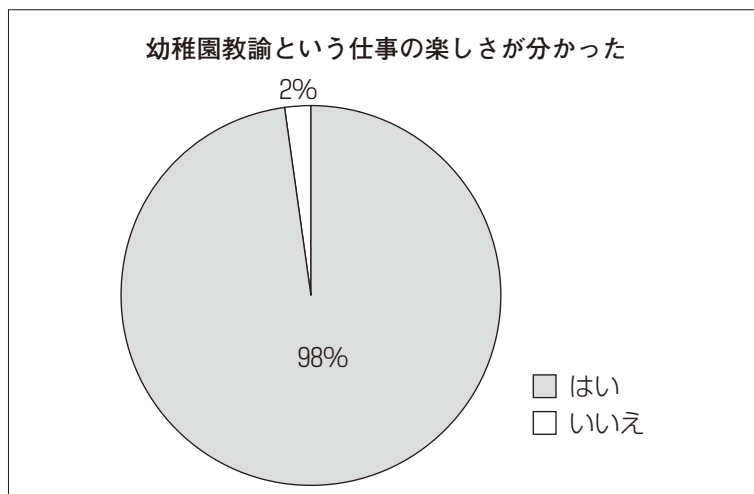


図 8

この実習において先生としての役割を体験することができたと回答した学生は、98%であった。

10、幼稚園教諭の仕事について（楽しさ・やりがい）



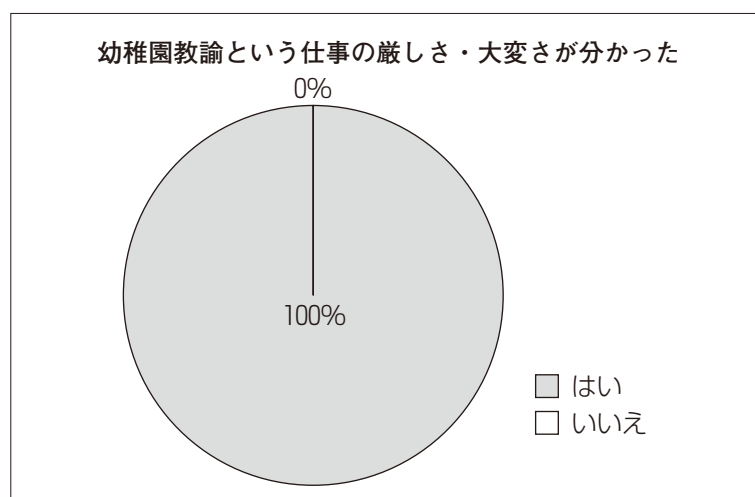
図、9

幼稚園教諭の仕事の楽しさややりがいについて、理解できたと答えた学生は、全体の98%という結果であった。

*** 幼稚園教諭としての具体的な仕事の楽しさ**

- ①子どもの成長を一番身近で感じ、見ることができる。
- ②子どもと一緒に生活することで、一緒に楽しむことができ、共に成長できる。
- ③友達同士で協力し合い、頑張る様子を見ることができる。
- ④子どもと一緒に遊んで遊ぶことで子どもの世界観を感じられる。
- ⑤手遊びや紙芝居に子どもたちが興味を持ち、笑顔で楽しそうに一緒に行ってくれるのを見ることに楽しさを感じた。
- ⑥子どもと一緒に全力で楽しめば信頼関係を得ることができること。
- ⑦子どもと一緒に遊ぶことにより、自分自身の感性が豊かになっていったことが感じられた。
- ⑧多くの子どもたちと関わるができること。
- ⑨学生自身が子どもたちに伝えたことを全員で行ってできたときの達成感。
- ⑩子ども自身が楽しそうに自分の話を無邪気にしてくれたこと。
- ⑪毎日自分自身を待っていてくれる子どもがいるということ。
- ⑫自分自身の言葉に対して子どもなりに考えて反応してくれたこと。
- ⑬子どもと共に何かを作り、成功したときの達成感。
- ⑭子どもが自分自身を頼ってくれ、駆け寄ってきてくれたとき。
- ⑮大人が想像できないような遊びを生み出しており、その発想豊かな表現を見ることができること。

11、幼稚園教諭の仕事について（大変さ・厳しさ）



図、10

幼稚園教諭の仕事の大変さや厳しさが理解できたと答えた学生は、全員であった。

***具体的な幼稚園教諭の仕事の大変さ・厳しさ**

- ①一人一人個性があるため、その子に合った対応が求められること。
- ②個人差により、時間のかかる子どもやじっとしてられない子どもに対しての対応やそのような子どもも含めての保育は大変であるということ。
- ③子ども同士のけんかの仲裁や対処法。
- ④年齢によって声掛けを変化させなければならないところ。
- ⑤子どもたち全員の様子や行動を把握していくこと。
- ⑥子どもたちがどのような反応をするのか、動くのかを予測し保育をすること。
- ⑦子どもに対して平等な接し方をすること。
- ⑧子どもたちの力を伸ばすために、どのような声掛けや援助をしなければならないかということ。
- ⑨仕事にスピードが求められること。
- ⑩集中して何かを行っているときの片づけや移動を促すことの難しさ。
- ⑪子どもが何故悲しくて辛いかを最後まで聞き、その気持ちに寄り添い解決していくことの難しさ。
- ⑫主活動を行うときの導入の仕方。
- ⑬子どもの心の中にどこまで踏み込んでいけば良いか。
- ⑭絵本の読み方。
- ⑮遊びを見守りつつ、広げていくこと。
- ⑯保育者としての立ち位置。
- ⑰個人差がある中での一斉活動の保育の仕方。
- ⑱言葉で伝えることができない年少児の思いを読み取ること。

12、今回の実習で勉強になった点

- ・初めての实習だったため、基本的なところからすべてが学びであった。
- ・保育者と子どもの関わり方を具体的に見て学ぶことができた。
- ・保育者の行動や声掛けを具体的に見て学ぶことができた。
- ・子どもの発達段階を見ることができた。
- ・子ども一人一人に応じた援助の在り方について知ることができた。
- ・子ども同士の喧嘩の対応を知ることができた。
- ・保育職に壁を感じたが、同時に興味を持つことができた。
- ・保育職は子どもが好きなだけでは務まらない仕事であると感じた。

13、これからの自分自身の課題について

- ・手遊び、歌、紙芝居、絵本、折り紙のレパートリーを増やし、それを実践でうまくこなせるように練習を行う。
- ・責任実習のピアノにそなえる。
- ・要領を得た日誌の書き方。
- ・目上の人に対する言葉遣い。
- ・基本的な学力を身に付ける。

- ・ 社会人としての教養やマナーを身に付ける。
- ・ 積極的に行動する。

Ⅳ. 考察

本研究は、幼稚園教諭の資質向上に向けての指導の在り方や学生の成長を幼稚園教育実習を終えた学生の振り返りのアンケートを分析することで明らかにしようとしたものである。

まずは、各項目についての考察を行いたい。

1、実習の配属クラス配分について

観察・見学実習を2週間行うにあたり、本学では、幼稚園側になるべく子どもの発達段階を把握させていただきたいということをお願いしていることから、6割の学生が3学年を数日ずつ又は、2学年を5日ずつという配属の結果であった。この学生たちは、確実に子どもの発達段階の違いを学ぶことができたようである。

しかし、10日間同じクラスに配属された学生も3割を占めていた。このことは、幼稚園側の都合もあると思われるが、学生にとってすべての期間を同じ指導者、指導法で実習を行うことができるということである。子どもの発達段階の相違を把握することは困難であったかもしれないが、指導法が保育者の違いによって変化することがない分、混乱することがない点は利点である。

2、子どもの名前の記憶について

子どもたちの名前を全員覚えることができたかという点については、約半数が覚えることができたという結果であったが、これは、配属クラスのクラス配分が大きく影響している。

10日間同じクラスで実習を行った学生は毎日同じ子どもたちと接しているため、名前を覚えやすいといえる。又、5日間ずつ同じクラスで実習を行った学生も、子どもと共にいる期間が他より長時間となるため、記憶しやすいといえる。

配属クラスのクラス配分の日数がそのまま子どもの名前を記憶できたかどうかには反映されているといえる。

3、1日の保育の流れについて

1日の保育の流れをつかむことができたという項目に関しては、実習生の全員ができたと答えた。

この2週間の期間で幼稚園生活のすべての1日の流れをつかむという結論を出すことは当然ながらできないが、少なくとも実習した期間の1日の流れは把握できたようである。子どもの登園前から保育室の環境設定や園の掃除などを行った後、園児の登園後の保育、降園後の仕事など、保育時間が短いということもあり、流れをつかみやすかったことも理由の1つとしてあげられる。

4、1日の保育者の動きについて

この項目に関しては、99%の学生が保育者の動きについて把握できたと答えている。

実習生は朝、保育者と同時もしくは早めに登園し、保育者の動きを観察し、又その指示

に従い環境設定や保育の準備を行う。保育者と共に実際に動くことにより、子どもたちへの援助の仕方や言葉かけ、保育の仕方や流れを学ぶことができるのである。当然、この期間のみの保育者の動きであり、保育者としてのすべてを把握できたとは言えないことはつけ加えておかねばならない。

5、1日の幼稚園の仕事について

幼稚園の仕事については、96%の学生が覚えることができたと答えている。1日の保育の流れや保育者の動きなどの1日の幼稚園の仕事について学生自身がどの程度把握できているかをこの結果だけで判断することは不可能である。しかし前項目と同じく、短い期間ではあっても、初めての実習で実際に幼稚園で保育者と同様に子どもと共に生活し、その中でバスの運転手の方や用務員の方、事務の方などの様々な仕事を見て、殆どの学生がそれなりに幼稚園の仕事について把握することができたということがうかがえる。

6、実習日誌の書き方について

日誌の書き方に関しては、要点を押さえて記述することができたと回答した学生が、8割を超えた結果となった。これは、学生自身の感覚での回答であるため、保育者の日誌に関する所感との整合性を分析する必要があるが、学生は書くことに関しては上手く記述できたと考察しているようである。これは、実習指導において、実際の1日の保育をビデオで視聴しながら要点を記述することの練習を行った結果であろう。

又、園側の実習日誌の書き方に関しての指摘事項は、誤字脱字や漢字で書ける箇所は適切に漢字を使用して書くことや、言葉の言い回しや表現の仕方、話し言葉で記述してしまうことに関するものであった。このことは、実習指導の時間でも指導を行ってきたが、これまで培ってきたことをすぐに理解し訂正することはなかなか容易ではないため、時間をかけて学生自身に意識付けを行いながら正していく必要がある。

7、子どもとの関わりに関して

積極的に子どもと関わる事ができた学生が98%と高い結果となった。この結果は、授業時に子どもとの信頼関係は、子どもが話しかけに來たり、遊びに誘ってくれることを待っているとは築けないということを事例を交えて話し、指導した効果であるといえよう。

具体的な関わりに関しても、積極的に自分自身から声をかけて遊んだ、遊びが広がるように子どもたちの遊んでいる遊具を使用しやすいようにそばに置いた、どのような遊びに興味を持っているかをコミュニケーションをとりながら把握するよう心がけたなど、自分から努力して子どもと関わっていることを確認できる。

8、適切な指導や援助の仕方について

この項目に関しても、適切な指導や援助の方法が理解できたと回答した学生が98%と高い数値であった。このことは、保育者の1日の動きが分かったという項目と密接に関係しているといえる。適切な指導や援助の仕方は、保育者の動きが把握できなければ学べないことであると考えられるためである。

具体的な援助の方法としては、子ども同士のいざこざに対する保育者の言葉かけや援助の

仕方、成長や発達段階に即した援助を行う、援助の仕方も全てを行うのではなく、自分の力でどこまでできるかを把握したうえでその子に合った援助を行うなど、実際に体験し、経験しなければ学ぶことのできないことを学べたことがうかがえる。

9、先生としての役割の体験について

この項目で、先生としての役割を体験することができたと答えた学生は、98%であった。実習受け入れの際、指導の在り方に関するプリントにおいて、観察・見学実習ではあるが、絵本や紙芝居の読み聞かせ、手遊びは可能であれば体験させていただくお願いをしている。そのため、幼稚園側の配慮により、部分実習を行わさせていただけた学生がほとんどであったことが読み取れる。

又、授業時において、今後の実習のためや実際に保育者になるためにも、部分実習などは経験させていただきたいということを積極的に保育者に申し入れるよう伝えてきたため、学生自身から申し出て、保育者として子どもの前に立ち、実演したことも高い数値の要因の1つである。

10、幼稚園教諭という仕事について（楽しさ・やりがい）

この項目について把握できたと答えた学生も、98%と高い結果が出た。実際の現場で子どもと接する中で、子どもの成長を目の当たりに見ることができることや、子どもと一緒に遊ぶことで子どもの世界観を感じることができたり、学生自身が子どもと一緒に生活することで感性が豊かになったり、成長することができるといったことを体験し、多数の学生が幼稚園教諭の仕事に楽しさややりがいを感じることはできたようである。

実際に子どもの変化を見ることができるとは、これから保育者を目指し、学んでいく者にとっては必要不可欠なことであるといえる。

11、幼稚園教諭のしごとについて（大変さ・厳しさ）

実習を経験した全員が、幼稚園教諭の仕事の厳しさや、大変さを実感したようである。

実習を行い現場で様々な体験をすると、子どもが好きという気持ちだけではできない仕事であるということを身を持って知ることができるようである。

子ども一人一人に個性があるため、クラス全体の対応はもとより、その子どもに合った対応が求められることや、発達段階により言葉かけや援助の仕方が異なること、子どもの力を伸ばすための環境構成や援助の仕方を工夫するといったことなど、子どもの外面のみでなく、精神面や内面に対するサポートも実際の保育に加え、必要になることを学んだことが把握できる。その上で、子どもの保育に対する実践力が必要であるという理解ができています。

楽しく子どもと遊び実習を行うのみでなく、それによって学生自身の子どものための学びが実践を通してより向上しているといえよう。

12、今回の実習で勉強になったことについて

これまで様々な項目について考察を行ってきたが、全ての項目において学生の学びの成果が顕著に見られた。

特に、この学びの中で多数の学生が、保育者の言葉かけに着目していることが明らかとな

った。例えば「保育者の声掛け一つで子どもは自信ややる気がわくことや、逆に落ち込んでしまうことが理解できた。保育者の配慮が込められた言葉かけは、子どもがどう感じ育っていくか左右するものだと感じた。子ども一人一人を見て保育をしている姿が勉強になった」「何をするにも準備があり、配慮が必要で積み重ねが大切であることが分かった。そして子どもそれぞれが各自のペースで成長していくことが大切であることを学んだ。そのためにはまず子ども一人一人の状態を観察し関わりあいながら拾い、受け止めることが必要だと感じた。先生の言葉かけ一つで子どもの受け取り方や気持ちが大きく変わることが分かった」とあるように、言葉かけ一つで子どもの状態や感情が変化していく過程を学ぶことができたことがうかがえる。

又、子どもを預かる責任の重さを実習で学び、振り返りを行ったことで実感し、保育職について壁を感じた者も数名存在したことも分析を行い、明らかになった点である。これらの学生については、この学びを基に実習指導者がサポートをしていき、強制ではなく学生自身が保育職にやりがいを感じるように導いていくことが重要である。

13、これからの課題について

実習中に具体的にこのようなアドバイスがあったため、このようなことに取り組みたいと記述されているものが多数であった。結果から、多くの学生の保育職に就くモチベーションが高まったといえることができる。そして、実習を経験したうえで、自己の保育者像が明確になった者もいたということが見て取れた。

V. 結論

本研究では学生が実習後に振り返りを行い、感じたこと、学んだことをアンケート調査により明らかにし、それを分析することによりそこから適した実習指導の在り方を探り、保育者養成における幼稚園教諭の資質向上を目指すことを目的としたものである。

結果から学生は座学では学ぶことのできない実際の幼稚園現場での1日の仕事や流れ、子どもの発達や特性、保育者の言葉かけや援助といった多くのことを学び、様々なことを感じたことが確認された。例えば、これからの課題と照らし合わせ、学びにつなげていきたいと次のように記述している。

「子どもたちの予測される動きについて自分の中であらゆる予測ができるようになりたい。自分で考えてできることは進んでやり、分からないことは進んで聞き、自分が保育者になった時に困らないように実習中にたくさんのことを学びたい」「実習でなければ学べないことがたくさんあった。実際に現場に出てみないとわからないことがいくつもあったため、その学びたい、知りたいことをリストにして、勉強に臨むときにも、それについての内容があったら詳しく調べたりしていきたい」「子どもたちに教えたり、伝えたりすることは大切だけれど、子どもたちから教えられることや気づかされることがあるということである。それなので、子どもたちの活動や発言を一つ一つ見たり聞いたりすることが大切だと感じた」「実習に行って、はっきりしていなかったイメージが明確になってきたので、これからもより勉強を頑張ろうと思う。又、実習を通して自分の足りない面など先生方からたくさんアドバイスをいただいたので、まずは次回の実習にそれらを生かし、より自分がなりたい保育者に近づけるよう頑張りたい」「今回の実習は初めてということもあり、実習がどんなものか知る

ことが一つの課題だった。次回からは全体に視点をおいていけるように少しずつ意識していきたい。子どもに対する言葉かけも今以上に工夫してできるようにしたい」。以上より、たった二週間であるが、充実した実習が行えたことがうかがえる。

又、実習日誌の重要性についてもこの結果から指摘できる。日誌を書くことで、実習生の保育に対する見方や理解の程度などを指導者は把握できると同時に、学生はその保育者の子ども観や保育観、環境構成などを学ぶことができる。表面的な保育者の言動だけでなく、その裏にあるねらいや意図、又、間違っただけで捉えていた点などに気づきやすく、それを保育者が指摘し、修正することができる。

さらに、後で省察したときに理解できるよう、将来保育者となった時に役に立つよう配慮し、保育者は長期的な視野に立って学生の成長のために指導している様子が見受けられる。例えば、「実習日誌は一生の物なので、子どもたちが行った“いただきます”の挨拶はきちんと記述しておくで後でわかりやすい」「自分が後で読み返すものなので、実習生の関わりとどのように接したかなどを詳しく書くこと」「排泄や水分補給の時間をしっかりメモをした方が今後の実習に活かせる」など、実習後の学びのために思っている指導がなされている。

このことから実習日誌は将来保育職に就いた時にも参考になる重要なものになるため、実習前の日誌の書き方の指導や、何のために大変な思いをして記述するかという意義を学生に確実に周知させておく必要があることが明らかになった。

又この結果から、学生のモチベーションが高まったことを無駄にすることなく、さらに先につなげるために実践的な指導を取り入れつつ、発達段階の確認や実際に子どもが遊んでいる場面や保育者が保育をしている場面などをビデオによって視覚的に学び、その場面での保育を行えば子どもにとって有意義なものになるかなど考察させる内容も扱っていくことが、学生の学びの質を高めることに繋がるといえよう。

学生の保育者になるという真剣な思いを受け止めつつ指導を行ない、この実習で学んできたことを実習指導者自身も学生と共に振り返ることが重要となる。又、その実習で学生が経験し、足りないと感じた点を指導者は確実に把握し、十分に補っていくことが、次回の実習や保育職に就く者の資質向上へとつながっていくといえるであろう。

参考文献

- 文部科学省「幼稚園教員の資質向上について－自ら学ぶ幼稚園教員のために」2002年6月24日
森田満理子・藤枝静暁「教育実習体験が幼稚園教員としての就職意欲に与える影響」『川口短期大学紀要』第24号、2010年、123-138頁
塚田まゆみ「幼稚園教育実習の現状」『鹿児島純心女子短期大学研究紀要』(38) 2008年、63-73頁